

中央高校の歴史に関わりのある題材

- 1 将棋と私
- 2 モニターに光る数字（3）
- 3 天地（1）
- 4 「知」の中央へ！（6）
- 5 （続）モニターに光る数字（2）

将棋と私（1）

皆さんは、大山康晴という人を知っていますか。生徒の皆さんには、知らないとは言わせません。体育館に掲げられている「校訓」の文字を書いたのは、ほかならぬこの大山康晴さんで、署名もしっかりと書かれているからです。

では、この人がどんなことをした人か、知っている人はどのくらいいるでしょう。20年以上前なら、日本でこの人の名を知らない人はいないくらい有名な人でしたが、今では、愛好家以外はむしろ知らない人の方が多いかも知れません。



大山康晴氏は、将棋のプロ棋士でした。しかしただの棋士ではありませんでした。12歳のときに、あるプロ棋士の内弟子として入門して以来、69歳で亡くなるまで57年間現役棋士として、試合に臨み続けました。亡くなったときもA級在位のままでした。ちなみにA級には10人しかおらず、この10人が1年間かけてリーグ戦を闘い、最も勝率の高かった棋士が名人に挑戦できるのです。逆に最も勝率の低かった棋士がB級1組に降格となり、B級1組で最も勝率の高かった人と入れ替わります。

大山康晴氏は、この間、数々のタイトル戦に挑み、1962年（昭和37年）には、創設されたばかりの棋聖戦で棋聖位を獲得して初の五冠独占（名人・十段・王将・王位・棋聖）を果たすなど、将棋界の第一人者であり続けました。

1973年（昭和48年）、それまで保持していたすべてのタイトルを失うことになりましたが、すでに名人位を5連覇していたため、1956年（昭和31年）には永世名人の資格を得ていたため、現役のまま1976年（昭和51年）に「十五世名人」を襲位することになりました。これらの永世称号を名乗るのは原則として引退後ですが、大山康晴氏が既に将棋界の一時代を築いてきた実績を持つ棋士であることが高く評価されたのではないかと思います。それに、彼自身引退を強く拒み続けていたからかもしれません。

大山康晴氏が本校の校訓を書いてくれたのは、体育館や校門に掲げられている校訓の揮毫を見てわかるとおり、すでに「十五世名人」を襲位したあとのことで、1990年（平成2年）のことと思われます。また、氏は同年、将棋界で初めて文化功労者に顕彰されています。

今回は、この大山康晴氏の生き方に触れながら、「将棋と私」について、お話ししたいと思います。（つづく）

将棋と私（2）

将棋のタイプには、「攻め将棋」と「受け将棋」とがあります。野球に「攻める野球」と「守る野球」があるのと同じです。これには、棋士の性格や人間性、ひいては人生観が反映されています。野球では、どんな野球をするのかは監督の考え方によるところが大きいでしょう。

ところで、大山名人の将棋は、忍耐強い受け将棋が信条だと言われています。絶対優勢な将棋でも無理に攻めず、じっと自陣を守る手や攻め駒を自陣に引きつけたりする手を指します。攻め合いでなんとか勝機を見い出そうとする相手の意欲を根こそぎ削ぐような、いわゆる「渋い手」が多いのです。こういう手を指されると、相手は指す手がなくなり、結果的に、一度の王手もされないうちに投了（「とうりょう」＝「降参する」ということ）してしまう人さえあります。

しかし、この大山名人の受け将棋は、最初からそうだったわけではありません。大山名人には、升田（ますだ）幸三という兄弟子（この人にはおもしろい逸話があり、別の機会に取り上げます。）がいますが、若い頃の将棋は、大山が攻め将棋で舛田が受け将棋だったそうです。後年はこれがどうしたわけか入れ替わってしまったのです。後年、舛田は、攻撃的な「新手」を次々と編み出すことになります。

大山名人は、対戦中よく相手の眼を見たのだそうです。相手が盤上のどこを見て何を考えているかを知るために相手の視線の方向をじっと観察していたそうです。そして、相手の意図を見抜いて裏をかくたりするのです。

現代の将棋は、普段の研究ではコンピュータを駆使し、膨大な指し手のデータから、最善手を見つけるなど、情報機器を活用するので、相手の表情から、何を狙っているのかを読み取ることは少ないようです。コンピュータによって結論が出てしまった指し手については、それ以上手を読むことをしないそうです。そのため、試合中に、相手がどこをみていようと、何を言おうと自分の研究の結果を忠実に盤上に再現するだけでよいのです。そして、どちらが事前に深く（コンピュータによって）研究してきたかによって、すでに勝敗は決しているような状況の中では、大山名人の時代のように対局中の心理戦に持ち込むことはとても難しくなっているのです。

さて、大山名人は、1959年 - 1966年（昭和34年 - 昭和41年、36歳 - 43歳）頃はタイトル棋戦ではほぼ無敵であり、1962年 - 1970年（昭和37年 - 昭和45年）頃も四度、五冠王になっています。特に、1963年（昭和38年）から1966年（昭和41年）にかけてはタイトルを19連続で獲得し、その間、他の棋士達にタイトルを一つも渡していません。この時期が大山名人のいわば全盛期と言えるでしょう。

この後、次世代の棋士達の台頭があり、大山時代は終焉を迎えますが、晩年になっても、ガンと闘いながら何度も復帰し、A級順位戦を闘い、タイトル獲得に挑み続けました。

また、60歳を過ぎ、何度も順位戦で降級の危機に瀕しましたが、「A級から落ちたら引退する」という強い決意をもって、A級の地位を維持し続けました。結局、平成4年に亡くなるまで、プロ棋士中わずか10人しか在位できないA級に留まり続けた精神的な強さは、並大抵のものではありませんでした。

今回は、私と将棋との関わりについて、少々お話ししたいと思います。（つづく）

将棋と私（3）

私が将棋を覚えたのは、小学校1年生の頃だったと思います。将棋好きな祖父のところに、毎日のように将棋仲間が集まって将棋を指していたので、その様子を見ながら、駒の動かした方やルールを自然に覚えていったように思います。小学校も高学年になると、ほとんど祖父や祖父の友達のおじいさん達には負けなくなり、そのうち皆私と指すことをいやがるようになっていました。

やがて、中学校に入学すると、同級生には私と互角に戦える人がいないため、ほとんど将棋を指す機会はありませんでした。そのうち、部活動も忙しくなり、私に将棋を教えてくれた祖父も、私が中学2年生の時に亡くなると、それからはほとんど将棋とは縁がなくなっていました。将棋そのものは好きで、よく新聞の将棋欄には眼をとおしていましたが、相手を探して挑戦し腕を上げたい、と思うほどではありませんでした。

ところが、やがて高校に入学すると、先生の中にめっぽう将棋の強い先生がいて、私が将棋が好きだということを知ると、「道場に練習にこないか。」と誘ってくれるようになりました。昔は、土曜日は午前中授業がありましたので、午後からその先生と一緒に「道場」に通うのです。「道場」といっても、そこはその先生の自宅で、土曜日には大勢の将棋愛好家が集い、ひたすら将棋を指すのです。私は、その時までしばらくの間、将棋は指していませんでしたが、小学校や中学校の頃の経験から、「自分の方が強いに決まっている。」と勝手に思い込んでいましたが、実際戦ってみるとどの人にも勝つことができませんでした。しかし、すべての人が私より年長者でしかも初対面の方々と、試合後の「感想戦」でいろいろと話すことが出来ました。「この局面では、こう指すべきだった。」とか「この局面でこう指したら、どういう展開になるのだろう。」と対局者同士が自分たちの将棋について話し合うのが「感想戦」ですが、自分がまったく考えていなかった手を指摘されたり、その対応の仕方まで考えた上で手を決めたことを知らされたり、自分の弱さを痛感させられたことを覚えています。

ともあれ、将棋が年代を超えて楽しめる知的スポーツであることを実感できたことは大きな収穫だったような気がします。

その後、高校3年生の時に将棋の県大会で3位に入賞出来たことは、その先生の「道場」と道場に集う将棋愛好家たちのお蔭でした。

私が教員になった頃、高校には「必修クラブ」というのがありました。必修クラブは、部活動とは違い、全員が必ずいずれかのクラブの所属し、授業時間の中で週1時間、顧問教師のもとで活動するものです。当時私は、将棋クラブの顧問を希望し、顧問にしてもらいました。週にわずか1時間の活動でしたが、この時間には、生徒達は私語もなくひたすら駒を打つ音だけが教室に響いていたことを覚えています。

私が中央高校に赴任した頃には、すでに「必修クラブ」は廃止されていました。「将棋の顧問になりたい。」と漠然と考えていた私は、当時受け持っていた1年生に声をかけ、「将棋同好会」を結成することにしました。女子の将棋人口が少ないことから、特に女子生徒に声をかけ、5名くらいの女子が集まってくれたように思います。

駒の動かし方から始め、毎日少しずつ練習することにしました。徐々にその成果が表れてきました。これらの生徒が3年生になったとき、女子生徒のうちの3名が当時宇都宮市で開催された関東大会に出場するという快挙を成し遂げました。県予選に出場した学校がほんの数校だったことも幸いしましたが、生徒達がこつこつ練習したことがやはり上達の鍵だったのではないかと思います。残念ながら、関東大会では上位入賞は果たせませんでしたが、私にとっては良い思い出となって残っています。その当時、県大会で優勝し、関東大会でも上位に入賞した本県のある高校の女子生徒

は、その後、女流プロになって現在も活躍しているようです。

体育館に掛かる校訓を見るたび、将棋同好会を指導していた頃の、あの女子生徒達を思い出します。その中の一人は、現在、数学の先生として、県内の高校の教壇に立っています。果たして、将棋はまだ覚えているでしょうか。何年かぶりに、一局指してみたいような気がしています。(おわり)

モニターに光る数字（１）

モニターに光る数字が
星々の秘密を語る
ひとりはるかを夢見るときも
人は人に学んで生きる
国々をこえ時代をこえて

（中央高校校歌より）



本校生なら誰でも知っている本校校歌の２番の歌詞です。この歌詞を書いた人は、詩人の谷川俊太郎氏です。谷川氏は、今から約60年前に詩人としてデビューし、現在もなお、詩を作り続けている、現代を代表する詩人です。その昔、大学の文学部で学んだ人にとっては、知らない人はいないくらい有名でした。国文学専攻の人は当然のこと、英文学を専攻した私ですら、よく教授がこの人を引き合いに出して、イギリスの詩人の解説をしたこともあって、この人の名前と業績ぐらいは知っていました。

たとえば、この人の詩に「ゆうぐれ」というのがあって、これを読むと、とても詩を読んでいるとは思えないような異様な感覚にとらわれたことを覚えています。

ゆうぐれ

ゆうがた　うちへかえると
とぐちで　おやじがしんでいた
めずらしいこともあるものだ　とおもって
おやじをまたいで　なかへはいると
だいどころで　おふくろがしんでいた
ガスレンジのひが　つけっぱなしだったから
ひをけして　シチューのあじみをした

このちょうしでは
あにきもしんでいるに　ちがいない
あんのじょう　ふろばであにきはしんでいた
となりのこどもが　うそなきをしている
そばやのバイクの　ブレーキがきしむ
いつもとかわらぬ　ゆうぐれである

あしたが なんのやくにもたたぬような

どうして漢字を使わないのだろう、これは悲惨な一家惨殺事件の話なのだろうか、それにしても家族が殺されているのに、父親の死を「めずらしいこともあるもんだ」などと言って、その死体をまたいだり、母親が作っていたであろうシチューのあじみをしている暇などあるのだろうか、などと、憤りさえ覚えつつ、とりとめもないことを考えながらこの詩を読んだような記憶があります。しかし、この詩が一体何を訴えようとしているのかさえ、当時の私にはさっぱりわかりませんでした。

本校に初めて赴任した当時、異様な作品を数多く書いていた谷川俊太郎氏が本校校歌の作詞者であったことを知り、とても驚いたことを覚えています。前回取り上げた大山康晴氏といい、この谷川俊太郎氏といい、本校はその当時の日本を代表する一流の人々によって、校訓といい校歌といい学校の骨格といえるような重要な部分が創られていたことに、感動すら覚えたものです。

その後、谷川俊太郎氏が作詞したこの校歌について、あまり深く考えることもなく日々の教育活動に埋没してしまいましたが、今年再びこの学校の教員となり、改めてこの校歌を見直してみると、この2番の歌詞の冒頭、「モニターに光る数字が 星々の秘密を語る」とは何を意味するのか、興味をもつようになりました。「モニター」とは何か、「数字」とは何の数字か、「星々の秘密」とは何の星座のどんな秘密か、などと疑問は次々と湧いてきました。

今回はこの谷川俊太郎氏が作詞した本校校歌の歌詞を取り上げることにします。この「星々の秘密」を解き明かすことができるかどうか、わかりませんが、つれづれなるままに、考えてみたいと思います。ただし、「ゆうぐれ」という詩と同じように、わからないまま終わってしまうかもしれませんが。(つづく)

モニターに光る数字（2）

谷川俊太郎氏が作詞した本校校歌の2番の歌詞の意味を解き明かすことがこのシリーズの最終的なねらいではありますが、その前に、この歌詞に込められた思いを知るために、1番の歌詞の内容から見ていくことにします。

何気なく肩におかれた
友達の手のあたたかさ
ひとりひそかに傷つくときも
人は人を信じて生きる
昨日を明日へむすぶこの今日

「友情」をテーマとし「人を信じる」ことの大切さを高らかに謳うこの歌詞は、実に分かりやすく、一読すればその意味がずっと頭に入ってくるものです。あえて斬新な視点をひとつ挙げるとすれば、「今日」を「昨日」と「明日」の中間点に位置付けた点でしょう。「今日」を精一杯生きるのも、「今」できることを今すぐやらねばならないのも、その先に「明日」があるからです。その意味では「今日を生きる」のではなく、「明日を生きる」と言ってもいいかも知れません。

そうした思いを「今日を精一杯生きよう！」とか「明るい将来を勝ち取るために、今日を頑張ろう！」などと野暮（やぼ）ったいことばは使わずに、「昨日を明日へむすぶこの今日」、つまり、「今日は昨日と明日の中間点です。昨日があって今日があるから、明日がくるのです。」とさりげなく言ったところに、谷川氏の詩人としての才能を感じることができるでしょう。

そして、校歌は前回紹介した2番に入ります。

モニターに光る数字が
星々の秘密を語る
ひとりをはるかを夢見るときも
人は人に学んで生きる
国々をこえ時代をこえて

（中央高校校歌より）

冒頭の2行は、あとで触れるとして、3行目以降は、「広大な宇宙のなかで、はるかを夢見るちっぽけな人間。それでも人間は、無限の時の流れにあっても『人から学びながら生きていく』ものだ」と説く雄大な詩です。その意味では、2番のテーマは、「広大な宇宙空間」「永久に続く無限の時間」の中で生きる、ちっぽけな人間の「はるかな夢」ではないかと思います。

さて、少々遠回りをしましたが、冒頭の2行、「モニターに光る数字が 星々の秘密を語る」に話を戻さなければなりません。

次回（最終回）は、いよいよこの「星々の秘密」に迫ろうと考えていますが、少々お時間をいただくことになるかも知れません。（つづく）

モニターに光る数字（3）

このシリーズを始めたとき、正直言って私には、本校校歌の2番の「モニターに光る数字が／星々の秘密を語る」の「星々の秘密」に辿（たど）り着く術（すべ）はまったくありませんでした。だから、私の原稿をいつもホームページにアップしてくれる大崎先生には、「しばらく休刊になるかも知れない。」と話していました。

ところが、数日して、大崎先生が「(星座の秘密は) これかも知れませんよ。」とあって、あるウィキペディアからの資料を渡してくれました。

その資料に目をとおしてみると、「(モニターに光る) 数字とは、確かにこれかも知れない。もしそうであるなら、『星々の秘密』の意味も解けるのではないか。」という気がしてきました。

さて、それはいったい何だと思えますか。

大崎先生がくれた資料は、ひとつは「野辺山宇宙電波観測所」に関するもので、もう一つが「電波天文学」に関するものでした。その資料を読んでもみると、次のことが判明しました。

- ① 野辺山宇宙電波観測所という、日本を代表する電波天文台が八ヶ岳のふもと、長野県南牧村にあつて、口径45mの世界最大級の「ミリ波電波望遠鏡」を備えている。

②「ミリ波電波望遠鏡」を使えば、一度に25点を正確に測定し、短時間間隔で電波を発する天体のデータを取得することができる。

③ 星座から発せられる電波は、データ化されてモニターに映し出されるが、その際、映し出されるのは、星座を示すアルファベットと数字だそうである。たとえば、はくちょう座Aは「3C 405」、乙女座Aは「M87」、ケンタウルス座Aは「NGC5128」と表示される。

「モニター」がこの電波望遠鏡で捉えた画像のモニターだとすれば、そこに映し出される「数字」は星座を意味する数字となります。つまり、これらの数字は、何の星座を意味するか、つまり、「星々の秘密」を語ることになります。

このように考えると、「モニターに光る数字が 星々の秘密を語る」という意味の謎が解けます。

天体が放射する電波を観測し、その電波の強弱や波長の長短によって、天体の性状を知る学問を「電波天文学」と呼ぶそうですが、本校が創立された当時、この電波天文学は、野辺山宇宙電波観測所に設置された電波望遠鏡などのハイテク機器の発展とともに、急速な進歩を遂げています。本校校歌が創られたのは、平成元年のことですが、翌年には、「直径 80cm のアンテナ 84 台を東西 490m、南北220m の T 字型の線上に配置した太陽観測専用の電波望遠鏡」（野辺山宇宙電波観測所－Wikipediaより）である「電波ヘリオグラフ」が（おそらく日本で）初めてこの野辺山宇宙電波観測所に設置されました。この望遠鏡により、プロミネンスや黒点を視覚的に観察できるようになり、「毎秒10枚の電波画像」により、天候にかかわらず毎日太陽の観察が出来るようになりました。

当時、谷川氏が、日本でめざましい進歩を遂げていた電波天文学の知見を「モニターに光る数字が 星々の秘密を語る」ということばで本校校歌の中に表現したことは十分想像されることです。

以上が、理科を担当する大崎先生の手を借りながら辿り着いた「星々の秘密」の解明です。そして、さらにもう一つこの説を裏付ける事実があります。それは、谷川氏自身、天文学には造詣が深かったのではないかと思われることです。詩人としてのデビュー作は、「二十億光年の孤独」という詩であり、「火星人」「宇宙」といった言葉も飛び出す広大な宇宙空間の中でのちっぽけな人間の「孤独」をテーマとしています。

最後に、谷川氏のこの処女作を紹介して、本校校歌の「星々の秘密」探しを終わりにします。が、この解釈が決して絶対的なものとは考えていませんので、「星々の秘密」の別な解釈をおもちの方がいれば、是非その新説をお寄せいただければと考えます。

本校もそろそろ創立30周年を迎えますが、その時までには、是非谷川俊太郎氏にお会いして、作詞者自身から『真実』の「星々の秘密」を語ってもらえればと考えています。

二十億光年の孤独

谷川俊太郎

人類は小さな球の上で

眠り起きそして働き

ときどき火星に仲間を欲しがったりする

火星人は小さな球の上で
何をしてるか 僕は知らない
(或いは ネリリし キルルし ハララしているか)
しかしときどき地球に仲間を欲しがったりする
それはまったくたしかなことだ

万有引力とは
ひき合う孤独の力である

宇宙はひずんでいる
それ故みんなはもとめ合う

宇宙はどんどん膨らんでゆく
それ故みんなは不安である

二十億光年の孤独に
僕は思わずくしゃみをした

(おわり)

天地

校舎前庭の一角に「天地」と名付けられた、一人の少女が右手で天を、左手で地を指さしているブロンズ像が建っています。また、校舎内の生徒ホールには、そのブロンズ像の写真と、像が建てられた謂（い）われが掲げられています。

その解説によると、このブロンズ像の制作者は、市内小岩戸に在住の彫刻家、磯辺末之助氏で、日本美術展覧会などでも数多く入選されている、本市を代表する彫刻家です。市役所や美野里中学校など市内各所に磯辺氏の作品が展示されているそうです。

平成11年3月に本校を卒業した（第10回）卒業生が、その磯辺氏に依頼してこのブロンズ像を制作し、卒業記念品として学校に寄贈したのだそうです。

そして、そのモデルとして選ばれたのが、体育コースの藤田（旧姓 鶴田）尚子さんだったというわけです。藤田さんは、当時バスケットボール部に所属し、県大会等で活躍していました。大学卒業後は、地元に戻り、現在介護関係の仕事に就かれています。

ブロンズ像の制作当時は、藤田さんが茨城町上石崎の自宅から、磯辺氏のアトリエがある小岩戸まで、毎日自転車で通われたそうです。





以上の内容が、生徒ホールของブロンズ像の写真の下に添えられた「解説」に書かれていますが、実はこの写真と解説が掲げられたのは、ごく最近のことで、前校長櫻井茂幸氏が前庭のブロンズ像の謂（いわれ）を調べてわかったことを生徒に紹介したいという思いから掲示したのだそうです。

ところで、このブロンズ像が制作された当時、私は教員として本校に在籍してはいましたが、藤田さんが3年生だった平成10年度の1年間は、英国に留学していたため、学校にはいませんでした。だから、このブロンズ像がいつ、どのようにして建てられたのか、ましてやそのモデルが藤田さんだった

などということはまったく知らずに、学校に戻ってからの数年間、この学校で教えていたことになります。

櫻井前校長がその謂（い）われを調べて記してくれなければ、ブロンズ像について、私は何も知らずに過ごしていたことでしょう。このたび、ウェブページへの掲載のお許しを得るために、藤田さんに連絡したところ、快く了解していただきました。その際、私が以前この学校に勤めていたことを話すと、藤田さんはびっくりして、英語教師だった私のことを憶えていると話してくれました。

15年の時を越えて、ブロンズ像を介して藤田さんと再び巡り会えたような、そんな気がしています。（おわり）

「知」の中央へ！（１）

常磐線羽鳥駅を降りると、南口出口のところに駅の改札口を向いて立てられた本校のPRの看板が見えます。その看板には、大きな文字で、『知』の中央へ！」と書かれています。

私は普段は自家用車で通勤しているため、この看板を見ることはないのですが、たまに電車を利用して通勤する時には、必ず目にするキャッチフレーズです。しかし、これを見るたび、『知』の中央へ！」の「知」とは何だろうと考えさせられます。



今回は、本校の看板にある、このキャッチフレーズ、『知』の中央へ！」を取り上げます。私が赴任する前に掲げられた看板で、当時設置した校長先生がこの「知」にどんな意味を込めようとしたのかはわかりません。その記録も残っていない今となっては、想像でしかありませんが、私なりにその意味を解釈してみたいと考えています。

「知」には、様々な意味があります。そして、様々な使い方があります。「知識」「知恵」「知覚」「知性」「知的」「認知」「英知」「叡知」……。さらに、「知識」の分類では、「形式知」や「暗黙知」などというのがありますが、普通、人が「知」と聞くと、「知っていること」「知識」「知恵」などをまず始めに連想するのではないのでしょうか。そうだとすると、『知』の中央へ！」と聞くと、多くの人は「中央高校に入学して、知識（又は知恵）を身に付けよう」という意味に解釈するのではないのでしょうか。

学校教育ではよく「知育、徳育、体育」のバランスが大切だと言われ、このトータルバランスを高めるための教育がなされています。看板の「知」が「知育」のことなら、本校は3つのうち、「知育」だけに特化して、「勉強だけでできればよい」という生徒を育てようとしているのでしょうか。

人間性を育てるには、「知性」だけでなく、「豊かな心」や「強い意志」を養う必要があると言われています。いわゆる「知・情・意」のバランスが大切だと言われています。もし、「知」が「知性」なら、本校は、3つのうち「知性」だけを磨き、「豊かな心」の育成をないがしろにしていることになります。

確かに、本校は地域の進学校として、授業を大事にし、土曜課外を実施したり、平常日も遅くまで課外を実施し、その結果として、国公立大学の合格者数を増やしたりしていますが、学校が最も力を入れているのは、単に国公立大学の合格者を増やすことなく、生活指導や道德教育を充実させた「人間教育」であることを考えれば、「知」が単に「知識」「知育」「知性」といった「知」の一面だけを指すものだとは考えられません。

そんなことを考えていたら、ある時、ふと、一つの言葉が頭に浮かびました。そして、それが「知」の謎を解く鍵となったのです。（つづく）

「知」の中央へ！（2）

皆さんは「知行合一」という言葉を知っていますか。「ちこうごういつ」と読みます。一般には、「知ることと行うことを一致させる」ということから、「身に付けた知識を行動で示すことが大切である。」という意味だと考えている人も多いと思いますが、それはちょっと違います。

「知行合一」の「知」とは、単なる知識ではなく、「人間が本来もっている判断能力」（大辞林より。）であって、学んで得た知識のほかに、「勇気がある」とか「思いやりがある」とか「人に優しく接する」とか、人格者には備わっていると思われる、人の徳性のすべてを含みます。この「知」は、単なる「知覚」や「知識」と区別するために「良知（りょうち）」とも呼ばれます。

「行」とは、「実践」という意味で、「実践」とは「良知を事物に致すこと」、「致す」とは「事物が自らの心と一になること」を意味します。わかりやすく言うと、「知行合一」とは、「知識を含め、心の中にある、人としての徳（人徳）は、自ずと行動（実践）に表れるものであるから、「知」と「行」とは一体をなすものである。」という意味です。

実は、この言葉、「知行合一」は、哲学者王陽明が創始した陽明学のもっとも重要な命題の一つで、幕末の志士、吉田松陰が、松下村塾の掛け軸に掲げた言葉でもあります。

冒頭、この意味について「身に付けた知識を行動で示すことが大切である。」ということではないと書いたのは、単なる「知識」なら、「行動」で示すことはできても、「知行」の「知」が人格や

人徳など人間性のすべてを指すものであるならば、そうした人徳は、自ずと外に表れるのであって、努力して行動で示すものではないからです。しかしながら、これが、「行動に移すことによって、初めて知っているといえる。」とか、「行動に移さないのは、知らないのと同じだ。」などと、行動を起こすことを急かす思想であるかのような誤解が一部に生まれてしまったことも事実だろうと思います。

さて、『知』の中央へ！」に話を戻します。

もし、この「知」が陽明学の、あるいは吉田松陰が松下村塾の掛け軸に掲げた「知行合一」の「知」であれば、他にいかなる言葉も付け加える必要はないでしょう。というのも、この「知」は、「人としてのすべての徳性」（これを「人格的統一主体」と言います。）を含んでいるからです。

以上が、私の『知』の中央へ！」の「知」の解釈です。が、当然のことながら、唯一無二の解釈ではありません。「知」に別な意味があるかもしれません。しかし、この「知」は、少なくとも「知育、徳育、体育」の中の「知育」だけではないこと、また、「知・情・意」の「知」だけではないことは明らかです。それは、日々、真摯（しんし）に生徒と向き合う、この学校の職員の熱意に触れれば、また、礼儀正しい生徒の挨拶を目の当たりにすれば、すぐにわかることです。

そして、すぐに気づくことでしょう。本校が「バランスのとれた人間の育成」を、とりわけ、「心の教育」には力点を置いていることに。（つづく）

「知」の中央へ！（３）

前回まで、『知』の中央へ！」の「知」について、その解釈を試みました。その試案（私案）では、（１）『知』の中央へ！」の「知」は、いわゆる「知・徳・体」の「知」のみの狭い意味ではないこと、（２）豊かな人間性を語る時の「知・情・意のバランス」における「知」のみをさすものではないこと、（３）「知」とは、「人としてのすべての徳性」（「人格的統一主体」）のことであり、（陽明学の）「知行合一」における「知」に近い意味であること、をお話ししました。

そこで、とりあえず私なりの解釈を終えようと改めて看板を眺めてみたとき、『知』の中央へ！」の下に記された英語による説明を見て、はっとしました。そこには、“Be at the center of intelligence-Chuo High School”と書かれていたからです。

「知」が“intelligence”（知能、知恵、知性）と訳されていたのです！“intelligence”では、私が前回さんざん否定した「知性」など人間の知的な部分に関する意味しかなく、「知行合一」の中の深遠な「知」は到底表現できません。

では、“intelligence”は誤訳だったのでしょか。



前回すでに見たように、「知行合一」の「知」は、単なる知識や知恵でなく、「人間が本来もっている判断能力」であり、人格や人徳など人間の精神性をすべて含みます。

ところがこれを英語で表現しようとすると、適切な語が見あたらないのです。“intelligence”のみならず、“morality”（道徳性）や“humanity”（人間性）をも含む「知行合一」の「知」には、それを

表現する英語がないのです。

これについて、本校に勤務するALTのエバン先生に聞いてみたところ、「"intelligence" は、"morality" や "humanity" とはまったく異なる概念をもつ単語なので、三者の意味を包含する語は思いつかないが、来週までに考えてくる。」とのことでした。これは彼だけが「思いつかない」のではなく、そもそも英語には、そんな意味を持つ言葉そのものがないのだと私はと思いますが、少々彼の返答を待ってみます。

たぶん、『知』の中央へ！』の英訳に "intelligence" を使われた方は、誤訳と言うより、「知」が「知性」のことだと思い込んでいたか、または、「知」と "intelligence" のイメージが異なっていたものの、これより適切な訳語を発見できなかったために、やむなくこの語を使ったものと思われる。「知」の英訳に普通使われる英単語－knowledge, wisdom, intelligence など－から比較的音の響きの良い "intelligence" を選択したのではないのでしょうか。でも、本校がめざすべき学校像を考えると、きつとじっくりしなかったはずですよ。

もし、看板を書き換える機会があれば、下記のように、「知」の英訳はあきらめ、説明の言葉をつけた方がよさそうです。また、この機会に、「中央にやって来い！」という命令口調はやめて、「おもてなし」の気持ちで中学生を歓迎しようではありませんか。

もともと、財政難の折、こんなところに使う金はないと言われてしまえば、それまでですよ。

「知」の中央へ！

Welcome to Chuo High School, the center of "CHI", intelligence, morality, and humanity”

(つづく)

「知」の中央へ！（４）

前回まで3回にわたって、『知』の中央へ！』の「知」の中身について、私なりに考えてみました。

最初の2回では、『知』の中央へ！』の「知」が、単なる「知識」といった意味ではなく、「人としてのすべての徳性」を含んでおり、「知行合一」と言う時の「知」に近い意味ではないかと指摘しました。続く第3回では、英訳されているスローガンに使われている単語が "intelligence" であることから、本来の「知」の意味を伝えきれないと考え、訳に若干修正を加えてみたい旨をお話しました。その修正の過程で、本校に勤務するALTのエバン先生の意見を聞いてみたところ、「若干時間がほしい。」とのことだったので、しばらく返答を待ってみることにしました。

いまやっとそのエバンさんから回答を戴きましたので、今回からは、それを紹介してみたいと思います。少々お付き合い願えれば、幸いです。

エバンさんへの宿題は、「日本語の『知』のように、英語には、"intelligence", "morality", "humanity" の3つの概念を内包するような言葉が果たしてあるか。あれば、それはどんな言葉か。」というものでした。少々長文ですが、エバンさんの回答を原文のまま紹介します。なお、日本語訳は段落ごとに付けておきます。

I think that Chuo's slogan is kind of clever. It's a nice play on words. However, Vice Principal Fukaya has told me that there is a deeper meaning to “知” (chi) than just “intelligence.” When I search for the meaning of 知 in the dictionary, one of those words is “wisdom.” Wisdom usually means knowledge gained from experience. I believe that “wise” is usually a positive adjective and is given to people who are in some ways humane and moral. Many of my colleagues agree, but some believe that this is not always true and that inhumane people could also be considered wise.

(中央高校のスローガン(「ようこそ、『知』の中央へ!」)は、なかなか効果的だと思います。言葉の使い方がうまいと感じます。しかし、深谷教頭が、「知」には、ただ単に“intelligence”(知性)と言うだけでなく、もっと深い意味があるのだと教えてくれました。そこで、辞書で「知」の意味を調べてみると、“wisdom”(叡智, 知恵)という語を見つけました。“wisdom”は、普通は経験に裏打ちされた知識を指します。私は、“wise”(聡明な, 賢い, “wisdom”の形容詞形。)という言葉は、普通、積極的な意味の形容詞で、ある意味で人情味のある, 人徳のある人に使われます。私の同僚の多くは、(私の考えに)賛成してくれましたが、「それは正しくないかもしれない、人情味のない人でも“wise”(聡明な, 賢い)ということがあるから。」という人もいました。)

I have spoken with many of my friends to try to find an equivalent word in English, but it has been a challenge to find a word that matches 知 perfectly. We thought of many words that closely represent the essence of either intelligence or morality: virtue, virtuosity, integrity, mindfulness, consciousness, propriety, cognizance, altruism etc. All of these words are great. Many of them are more closely related to morality, but have some nuance of intelligence.

(私は、多くの友人たちと(「知」に)相当する言葉を見つけるために話し合いましたが、完全に「知」に相当する英語を見つけることはできませんでした。私たちは、“intelligence”(知性)や“morality”(徳性)の本質的な意味に近い言葉をたくさん挙げてみました。“virtue”(徳, 美德), “virtuosity”(芸術, 特に音楽の妙技), “integrity”(誠実, 正直), “mindfulness”(心がけておくこと), “consciousness”(意識, 自覚), “propriety”(礼儀, 礼節), “cognizance”(知ること, 認識), “altruism”(利他主義, “egoism”

(利己主義)の対語、訳者注)などです。これらの言葉はすべてたいへん良いもので、その多くはより“morality”(道徳性)に関わりがあるものですが、“intelligence”(知性)という意味合いもあるのです。)

Two of those words that I think are interesting are virtue and virtuosity. Virtue represents morality and strength, and virtuosity means great technical skill. For example musical geniuses in Italy (and now in English speaking countries) were often called “virtuosos.” As for virtue, great leaders such as Gandhi would be considered virtuous. These words represent morality, strength and intelligence separately. However, they both come from the same Latin word virtus.

(これらの言葉のうち、私が興味をもったのは、“virtue”(徳、美德)と“virtuosity”(芸術、特に音楽の妙技)の二つです。“virtue”は、道徳性と知力を表しますし、“virtuosity”には、偉大な技量という意味があります。たとえば、イタリアの音楽の天才たちは、しばしば“virtuosos”(音楽の大家、巨匠)と呼ばれました。(今や英語を使う国々でもそう呼ばれています。))“virtue”に関して言えば、ガンジーのような偉大な指導者は、“virtuous”(人徳のある)人であると考えられるでしょう。これらの言葉は、“morality”も“strength”も、そして“intelligence”も表現しうるものです。しかしながら、どちらの言葉も同じラテン語の“virtu”に由来するものなのです。)

Even though it has been difficult to find a word which means intelligence, morality and humanity, I think that the subtleties of these words are different when you ask different people. I believe that in the end, all of these words would be excellent qualities, not only for Chuo students and teachers, but for anyone to have.

(“intelligence”(知性)も“morality”(道徳性)も、そして“humanity”(人間性)をも表現しうるひとつの言葉を見つけ出すことは、難しいことではありましたが、これらの言葉は答える人によって、微妙に意味が変わるものです。ただ、最後にこれだけは言っておきたいと思います。これまで挙げた言葉はすべて、中央高校の生徒や先生方だけでなく、すべての人にとって、身に付けるべき優れた人格であろうことは間違いがないということです。)

エバン先生、ご回答ありがとうございました。エバン先生だけでなく、エバン先生とともに、「知」の英訳を巡っていろいろと議論していただいた多くの友人の方々にも、この場を借りて、深く感謝

申し上げます。

今回は、このエバン先生の意見に対して、「知」を巡る私の考え方を少々書かせていただきたいと思います。(つづく)

「知」の中央へ！（５）

今回は、「知」の英語表現について、本校ALTのエバン先生が友人とともに格闘してくれた結果について、私見を述べさせていただきます。

その前に、エバンさんの主張を改めて整理してみます。

（１）「知」の英訳については、“wisdom”（叡智，知恵）という言葉が考えられる。というのは，“wisdom”は、普通は経験に裏打ちされた知識を指すからである。しかし、人情味のない人でも“wise”（聡明な，賢い）である場合もあるので、全員が一致した意見ではない。

（２）多くの友人たちと議論した結果、「知」に相当するであろう以下の言葉を見つけ出した。それは、“virtue”（徳，美德），“virtuosity”（芸術，特に音楽の妙技），“integrity”（誠実，正直），“mindfulness”（心がけておくこと），“consciousness”（意識，自覚），“propriety”（礼儀，礼節），“cognizance”（知ること，認識），“altruism”（利他主義），“egoism”（利己主義）の対語，訳者注）などであり，“morality”（道徳性）のみならず，“intelligence”（知性）という意味合いもある。

（３）これらの言葉のうち，“virtue”（徳，美德）と“virtuosity”（芸術，特に音楽の妙技）の２つがもっとも「知」に近いと考えられる。“virtue”は、道徳性と知力を表し、ガンジーのような偉大な指導者は，“virtuous”（人徳のある）人であると言われる。また，“virtuosity”には、偉業という意味があり、イタリアの音楽の天才たちは，“virtuosos”（音楽の大家，巨匠）と呼ばれている。

（４）“intelligence”（知性），“morality”（道徳性），そして“humanity”（人間性）を同時に表現するようなひとつの言葉は、なかなか見い出せない。というのも、それらの言葉は使う人によって、微妙に意味が異なるからだ。しかし、いずれにせよ、私たちが見つけ出した言葉はすべて、あらゆる人にとって、身に付けるべき優れた人格を表す言葉である。

エバン先生は、友人たちと協力して、「知」に相当するであろう英語をいくつもピックアップして、その中から、まずはじめに“wisdom”（叡智，知恵）を取り上げ、議論を経た上で、最終的に“virtue”（徳，美德）と“virtuosity”（芸術，特に音楽の妙技）がもっとも「知」に近いのではないかと結論付けました。“wisdom”（叡智，知恵）については、実は私も当初から考えていた言葉でしたが、あの「ハリー・ポッターと賢者の石」（Harry Potter and the Philosopher's Stone）の「賢者」のイメージ（本の題名には「哲学者」（Philosopher）とあるものの、日本語で「賢者」というと，“wise man”

を想起させる) が強く、「人情味あふれる」とか「人徳がある」といった、私がもっとも強調したい「道徳性」が表現できないのではないかと考え、熟考の上、却下してしまったものです。それは、エバン先生の友人が指摘した「人情味のない人でも“wise”(聡明な、賢い) な人がある。」という指摘にもつながっています。

“virtue”(徳、美德)については、私の中では、「道徳性」(morality)の意味が逆に強すぎ、学問的な知力(intelligence)をも表現するためには若干無理があるのではないかと、思い込んでいたため、その使用には躊躇(ちゅうちょ)していました。しかし、エバン先生が指摘したように、“virtue”は「道徳性と知力を表す」と英語を母国語とする、多くの外国人が考えているのであれば、「知」の第一候補に挙げられるのではないかと考えます。

“virtuosity”(芸術、特に音楽の妙技)については、私の「想定外」でした。“virtuosity”という言葉を知らなかったわけではありませんが、いわゆる「美の巨匠」というイメージで、私たちのような「普通の人々」がおいそれと到達しうるようなレベルの人ではありません。それに“virtuosity”は、ごく一部の「天才」しか持ち得ない能力であることを考えれば、本校のキャッチフレーズには適さないことは明白ですので、初めから「知」に相当する言葉の選択肢には入らないでしょう。

本校は、一部の天才を育てる学校ではありません。むしろすべての生徒に、人間としての「知」を養う教育を行うための学校です。いや、そんな学校をめざしたいと考えています。エバン先生は、寄せてくれた意見の最後に、「これらの言葉は答える人によって、微妙に意味が変わるものです。」と言っています。実はこれは重要な指摘で、抽象的な概念を表す言葉というのは、その意味がはじめから厳然と存在しているのではなく、その言葉を使う人が、その言葉にどんな意味を込めようとしているかによって意味が変わってしまうということです。

このシリーズの最初に、「日本語の『知』にはさまざまな意味がある。」と言いました。もちろん“intelligence”の意味もありますが、本校のキャッチフレーズとして『知』の中央へ!』と言ったときに、それが単なる“intelligence”だけの意味で使われているとしたら、それはあまりに悲しいことではないかという思いから、この論考を書き進めてきましたが、このへんで、一旦終わりにしたいと思います。

今回の『知』の中央へ!』については、特にエバン先生とその友人の方々に多大なるご協力をいただきました。心から感謝申し上げます。その方々の労力に報いるためにも、本校の「知」に我々の思いを精一杯込めて、生徒たちが潜在的にもっている能力を最大限引き出す努力をすることを

お約束いたします。エバン先生が友人たちとともにその意味の解明に力を貸してくれた、本校のスローガン、『知』の中央へ！」を掲げて。(おわり)

※ なお、本稿については、エバン先生とその友人の方々に対する感謝の気持ちを込めて、**英訳版(※5)**を掲載しておきますので、ご覧いただければ幸いです。

「知」の中央へ！(6)

前回まで、羽鳥駅に設置された本校の看板に記された『知』の中央へ！」の「知」について、ALTのエバン先生などの力を借りて、その意味を探ってきました。

このたび、偶然にもこの看板を設置した校長先生がわかり、その「知」に込められた意図も判明しましたので、シリーズを1回延長して、その思いを代弁しておきたいと思います。

その校長先生は、櫻井前校長のさらに一代前の萩野谷悟校長先生でした。

先日、偶然先生から電話があった折に、『知』の中央へ！」の看板に心当たりがあるかどうかを尋ねたところ、「心当たり」どころの話ではなく、看板は萩野谷先生自身が設置したものであること、『知』の中央へ！」は新入学生用に作成した「入学の手引き」の中の「巻頭言」に記した「知」のことであることがわかったのです。

つまり、この「巻頭言」を読めば、『知』の中央へ！」に込められた、当時の萩野谷校長の思いを理解することができるわけです。

その**巻頭言(※6)**には、このように書かれています。

さて、最近の国内外の動きを見てみますと、時代の変化の激しさや問題の複雑さを感じます。アメリカの凋落(ちょうらく)、アジア諸国、とりわけ中国の台頭など、世界は構造的な変化を遂げているように見えます。世界は歴史的な転換期にある、といっても過言ではありません。グローバル化した社会の中で、各地での民族問題や地球規模での環境やエネルギーの問題なども複雑化しています。

(中略)

そのような変化の激しい、複雑な問題を抱えた時代を生き抜いていくためには、専門的な知識・技能とともに、広く全体を見渡しながら柔軟に適切な解決法を見出していくための思考力・判断力・表現力などが必要です。また、それらに方向性を与える、基本的なものの考え方や人間の在り方生き方に関する確固たる考え—哲学と呼んでもよいかもしれません—が必要になります。こうしたものの総体をわたしは「知」と呼んでいます。この「知」が今ほど強く求められている時代はないと思います。

(下線部は引用者。「将来を見据えて—「知」の構築を！」(「巻頭言」より。「平成22年度入学の手引」平成22年3月19日発行。))

そして、萩野谷元校長は、生徒が「高校でなすべきこと」は「人格の完成をめざす」とことと「社会の形成者として必要な資質を高めること」の2点だと言い、そのために「自分の中に『知』を構築する」ことが重要だと指摘しているのです。

○ ○ ○

やっと、今『知』の中央へ！」の「創始者」自身による「知」の解釈に辿り着くことができま

した。

「専門的な知識・技能とともに、広く全体を見渡しながら柔軟に適切な解決法を見出していくための思考力・判断力・表現力など」、また、「それらに方向性を与える、基本的なものの考え方や人間の在り方生き方に関する確固たる考え」の「総体」を「知」と呼び、この「知」が、「今ほど強く求められている時代はない」と、萩野谷元校長は指摘しています。

実は、この「知」こそ、このシリーズでずっと探し求めてきた、「知行合一」の「知」であり、知性とともに道徳性、人間性をも意味する“virtue”と同義なのではないか（※7）と思われる。

萩野谷元校長が指摘した「基本的なものの考え方や人間の在り方生き方に関する確固たる考え」を生徒に身に付けさせるためには、道徳教育を含めた、本校の教育活動全体をとおして、生徒にしっかりと働きかけていく必要があると痛感しています。（おわり）

（※7）この考え方に基づき、羽鳥駅に設置している本校の看板の『『知』の中央へ！』の英訳を“Welcome to Chuo High School-the Center of Virtue”と書き換えてもらうことになっています。

（続）「モニターに光る数字」（2）

父母がともに隣町の病院に入院してしばらくして、ふと考えました。「本校校歌の作詞者の谷川俊太郎氏も私の両親と同年代。高齢なので、両親同様、いつ倒れても不思議ではない。」と。また、父が脳出血により記憶中枢を侵され、家族の名前すらおぼつかなくなったことから、谷川氏も「28年前に本校校歌を作詞した時の意図を忘れてしまわないだろうか。」と、誠に失礼ながら考えてしまったのです。「本校2番の歌詞の意味について、今聞いておかないと、取り返しのつかないことになるかもしれない。」という焦りを感じながら。

ある人に、いざものを尋ねようとしたときには、すでにその人はいない、ということに関して、実は、私には苦い経験があります。30年以上前の大学時代にお世話になった、文学部の小野二郎教授のことです。当時、先生はウィリアム・モリス（William Morris）の研究者として知られており、私は「イギリス思想史」か何かの講義を受講していました。ある金曜日の授業中に、ひとつ質問しようと思っようと思ったことがあります。「イギリスにおける階級制度」についての話だったかと思いますが、私は、ジェントルマンに関する質問（どんな質問かは忘れました！）をしようと思っていたのですが、なぜか、「来週も授業があるのだし、今聞かなくてもいいか。」と思い直してしまい、質問をしないで終わってしまいました。

ところが、教授は、翌日北海道に講演に出かけ、出張先で心筋梗塞を起こし、日曜日に亡くなってしまったのです！だから、翌週の授業は永久に行われることはなく、二度と教授に質問することもできなくなってしまったのです！

「思想」に関する質問は、数学のように誰に聞いても同じ答えが返ってくるものではなく、その人に直に聞く以外方法はありません。文学者「小野二郎」の思想は、「小野二郎」以外の人に聞いてもダメなのです。何ともやりきれない思いで、葬儀に参列した憶えがあります。

昨年、「モニターに光る数字」を教頭通信に寄せてから1年以上も経過して、突然谷川氏自身に聞いてみたいと思ったのは、家族や恩師へのそうした諸々の思いがあったからだと思います。

○ ○ ○ ○ ○

さて、では私がどんな方法で本校校歌の歌詞の意味について、谷川俊太郎氏の意見を伺おうとし

たか、そして、それはどんな意見であったか……。それらについては、次回お話ししましょう。
(つづく)

(続)「モニターに光る数字」(2)

谷川俊太郎氏の回答を得るために、私がまずしたことは、谷川氏の詩集の出版を手がけている出版社にコンタクトをとり、私の「谷川氏に対する質問」を谷川氏に届けてもらうことでした。というのも、通常、有名な詩人や小説家は、ご自身のブログやホームページを開設してはいても、返信可能な個人のメールアドレスについては公開していないからです。

そこで、私が連絡をとったのは、主に谷川氏の詩集を出版しているナナロク社という出版社でした。「谷川氏に伝えたいことがあるので、取り次いでほしい。」と依頼したところ、編集部からすぐに以下のような返答をいただきました。

「谷川俊太郎様へ、具体的にどのような依頼か、明記いただくと幸いです。谷川さんへは、日頃より大変にお問合せ、お手紙、ご依頼が多く、大切な本業の時間を確保するためにも、すべての方に返事はしておりません。そのこともあわせてご了承くださいませ。・・・」

「もしかしたら、希望が叶うのではないか」という期待を膨らませて、私は昨年の教頭通信の「モニターに光る数字」の原稿を送り、「モニターに光る数字が 星々の秘密を語る」という歌詞について、(1)「モニター」とは何か、(2)「星々の秘密」とはどんな秘密か、の2点の質問を行いました。

その結果、約1週間後に届いたのが以下のメールです。今回の依頼が学校を代表して行ったものであること、また、この回答についてはホームページ上で紹介させていただきたいことを編集部の川口さんに伝えてあることから、原文のまま掲載させていただきます。

深谷様

このたびはご連絡ありがとうございます。
ナナロク社の川口です。

先日ご質問いただいた件について、お送りいただいた資料とあわせて、谷川俊太郎さんに質問をお渡ししました。

谷川さんはその場で文章をお読みくださり、「1)2)ともに、ここに書かれている通りです、とお伝えください」とのことでした。
谷川さんに代わりまして、お伝えさせていただきます。

以上、よろしくご査収くださいませ。

川口恵子

ナナロク社の編集部の皆様には、お忙しい中、私の願いを汲んで、質問を谷川俊太郎氏に取り次いでいただき、さらに、谷川氏の回答をお伝えいただいたことに対しまして、改めて心より感謝申し上げます。

また、谷川氏には、わざわざ大切な時間を割いていただき、私の教頭通信に目を通してご回答をいただきましたこと、感謝の念に堪えません。この場をお借りしてお礼申し上げます。

これで、創立30周年の暁には、作詞者自身から解釈のお墨付きをいただいた本校校歌を声高らかに斉唱できるものと確信しています。（おわり）

教頭 深谷 浩一

（つれづれなるままに H25 ～ H27）